



発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 井上 富雄
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>



新年のご挨拶

『国民の求める歯科医療と社会保障の充実を図る』
歯科病院長 岡野友宏

あけましておめでとうございます。

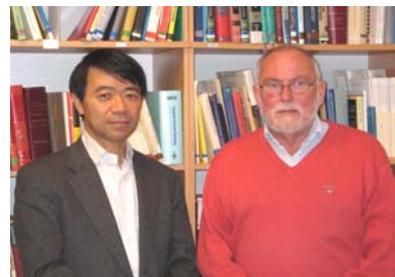
私たちの昭和大学歯科病院は、本学歯学部の附属病院として発足し32年目を迎えました。大学附属病院は教育病院として明日を担う歯科医師を養成することにその存在理由があります。最近では卒業直後の初期臨床研修が義務化されましたが、歯科においては大学病院がその中心となっています。一方、歯科はそれ自体が医療における一専門分野という見方もありますが、実際には歯科一般を共通基盤とし、さらに細分化した専門分野があります。教育研究上必要な専門分化という面もありますが、診療面で必要な専門分野でもあります。そのいくつかは厚労省の認める専門医制度があり、その臨床修練も大学病院で行われています。このように本歯科病院は学生から専門医に至る臨床教育・修練の場として、その役割を果たしています。教育の質は診療の質と表裏の関係にあります。本院としては診療の質を高めることによって、よりよい臨床教育に貢献できるよう引き続き努力いたします。

さて、明治時代に歯科の専門学校ができ、医師法に対して歯科医師法ができた時点で、歯科の教育は医学教育から分離されました。これはう蝕の治療や拔牙、引き続き義歯による歯科治療が、その技術修得や開発において、医科から切り離して独立した方が進歩が期待されたからでしょう。その結果、欧米各国も含めて歯科・歯学教育は著しい発展を遂げました。ただし注意すべき点は、歯や口は身体の一部であり、身体の中の部分とも同様に血管があり、神経があり、その代謝や機能も身体の中の部分とも同様に制御されており、また身体に生じる病気と同じような病気が口にも生じ、身体の病気の影響が口にも波及するという事です。ですから歯学部では医学部と同様に歯科の専門に加えて、身体全部を学べる教育が行われてきました。しかし独自に「進化」した歯科はいつしか身体を忘れるようになりました。ことに歯科診療の現場ではそれが顕著に表れ、歯科医は患者の口の中だけをのぞいて、患者の心や体をみない、と言われるようになりました。

いま、歯科は変わろうとしています。世界中どこでも高齢者が増加しました。高齢者はお元気な方であっても、生物学的な老化には抵抗できません。疾患を抱えていると考えるのが普通です。また何らかの身体的ないし精神的な障害をもった方であっても医療技術の進歩により

通常的生活を送る中で等しく医療サービスを受けられるようになりました。一方で、病気にならないような健康管理は本人の自覚に加えては社会の責任で行わなければなりません。ことに子供たちの歯・口は北欧など社会保障の発達した国では手厚く保護されています。こうしてみると私たち昭和大学歯学部の取り組んでいる教育改革の方向性は適切だったといえます。しかし同時に国の医療政策も変わらなければなりません。

医師、歯科医師の人口あたりの数は例えばOECD30カ国にあって、医師数は最低に近く、歯科医師数は平均です。一方でGDP比での総医療費も平均を下回り先進国では最低です。その上、歯科医療費の占める割合が7%程度と低い。人口あたりの歯科医師数が日本よりずっと多い欧米諸国では過剰問題が話題とならず日本で問題になるというのは、歯科医療の供給制度が異なることと歯科医療費の低いことによります。私たちは医療制度を学び、わが国に相応しい制度を考え、意見を述べることで、これが社会保障の充実には必須であり、国民に対する私たちの責務と考えます。



(写真は、共同研究のために訪問したイエテボリ大学歯科放射線科のGrondahl教授とともに)

上條奨学賞(研究奨励)を受賞して

『歯科治療時の安全・快適な全身管理システムの構築』

歯科麻酔科 吉村 節

今回、上條奨学賞を受賞し大変光栄に存じます。

麻酔は手術室における全身麻酔から始まったものですが、医科においては「ICU」「救急医療」「喘息外来」「疼痛治療」にその領域が広がっています。

一方歯科麻酔では「鎮静法」が特に進化を遂げました。その背景として、「歯科治療にもアメニティを求める現代社会」「患者の高齢化に伴う積極的な全身管理の必要性」「インプラント



治療の普及」などが挙げられます。

私どもは歯科治療に鎮静法を応用することで歯科治療の快適性・安全性の向上を目指してきました。歯科治療時の呼吸管理は麻酔科医にとっては非常に制約を強いられるもので、鎮静法においては全身麻酔よりもさらに高度な呼吸管理が求められます。私どもが行ってきた研究に加えて、鎮静に応用可能な薬剤・モニタや注入ポンプなどの器材が開発された結果、通常の歯科治療や小手術については、術者・患者の両者にかかなり満足していただける「安全・快適な歯科治療」のための鎮静法が実現可能になったと感じています。

今後、インプラント手術の為の鎮静法の確立が求められます。私の感触ではインプラント手術の多くは神経ブロックと鎮静法で対応可能であると思います。

私の目指す鎮静法は、全身麻酔の延長上にあるものです。全身麻酔の適用ができないから鎮静法で我慢するのではなくて、全身麻酔を必要としないほどの高度で質の高い鎮静法の開発です。

今後、「インプラント手術を視野に入れた長時間の鎮静法」および「鎮静法の自動化」を検討課題にしていきたいと考えております。

香港大学における技能態度試験 OSCA

歯科医学教育推進室 片岡竜太

昭和大学と香港大学は平成19年に学部間の国際交流協定について合意し、それより学生や教員の交流が盛んに行われております。今年度は Oral Rehabilitation 科(補綴科)の Botelho 先生をお招きして、11月26日(水)歯科病院第1臨床講堂において、香港大学の OSCA について講演していただきました。香港大学では1998年に新カリキュラムを導入し、PBL を中心とした統合型の教育を行っています。卒業の要件が文書として明確になっており、臨床実習は2年次のスケーリングに始まり、臨床参加型の教育を取り入れております。5年の卒業までに、すべての卒業の要件に到達するように、各学年主任がそれぞれの学年の到達目標を設定し、各学年の最後に進級試験を行います。臨床技能・態度試験(OSCA)を2年次、4年次、5年次におこなっており、特に4年次、5年次の試験は進級、卒業に重要な試験です。香港大学の OSCA は臨床技能・態度試験ですが、筆記試験や口頭試験も含むもので、共用試験 OSCE とは少し異なります。

本学では臨床実習をさらに充実させるために、来年度から臨床実習終了時に態度・技能評価試験を行うことが決まり、香港大学の OSCA の要素を取り入れた昭和大学オリジナル OSCA を4日間にわたり行う



予定です。そのために臨床実習の責任のある先生方を中心として、1月8日に香港大学4年生の OSCA を視察いたしました。今後は十分な討議を重ねて、昭和大学オリジナル OSCA(仮称)を取り入れていきたいと考えております。学部教育の目標を明確にし、学生と教員が同じ目標を持って、昭和大学卒業を誇る学生を一人でも多く輩出できるように、微力ながら努力したいと考えております。よろしくご指導、ご支援をお願いいたします。

香港大学でのOSCA実施見学

歯科補綴学教室 菅沼岳史

平成21年1月8日に香港大学歯学部において実施された OSCA (Objective Structured Clinical Assessment) の視察に、1月7日～9日の日程で中村雅典教授



を団長として、教授会の臨床実習検討ワーキンググループの山本教授、馬場教授および片岡准教授と井上美津子教授、真鍋准教授、倉林准教授、島田講師、宮澤講師、渡邊講師、野中助教および菅沼の12名が参加いたしました。今回の視察は1998年から実施されている香港大学の OSCA を参考にして、既に教授会で承認された臨床実習終了時の OSCE の実施に向けて具体案を検討することが目的です。

OSCA 当日は、ワンフロアのスキルスラボにおいて、21のステーションで52名の学生を26名ずつ、午前、午後に分けて行われ、すべてのステーションから学生がローテーションするショットガン方式により行われました。試験は1課題10分で、臨床技能、コミュニケーション技能、診断および基礎的な内容も含む複合問題など多岐にわたっていましたが、評価者による評価は数課題のみで、ほとんどの課題があらかじめ準備された質問に対し診断名や義歯の設計、治療計画などを記述する方式が採られており、現在の日本の共用試験 OSCE とは若干異なる形式でした。

終了後は宿泊先ホテルにおいて、反省会と今後の準備に関しての討論を行い、香港大学の OSCA を参考にし、昭和大学独自の臨床実習終了時 OSCE に向けて今回の参加者が中心となって活動していくことが確認されました。臨床実習終了時の評価をきちんと行うことにより、臨床実習がより充実することを祈っております。



昭和歯学会が開催されました

昭和歯学会常任理事(庶務担当) 中村雅典

12月6日土曜日に第28回昭和歯学会例会が歯科病院で開催されました。特別講演、退任講演、教育講演、並びに一般講演・ポスター発表が行われました。特別講演は日大松戸歯学部附属病院長の和田守康教授による“臨床現場での臨床実習と医療サービス”というタイトルで、臨床参加型臨床実習に向けての松戸歯学部の取り組みだけでなく、先生の教育に掛ける情熱など含蓄のあるお話をいただきました。

退任講演は今年度で定年退職される松本光吉教授が“40年間の研究・教育・診療を振り返って”と題して、多くのスライドを示されながらこれまでの先生並びに教室のお仕事を中心に講演されました。また、教育講演では、現在歯学部で行われているPBL、低学年からの臨床参加型実習、OSCE



についての話しに加え、4学部横断による医療人教育に関して、薬学部

の木内祐二教授にご講演いただき、最後に宮崎隆歯学部長からこれからの本学歯学部教育の方向性についてのお話がありました。一般口演は基礎・臨床教室から17題の演題が出され、これまでの研究成果についての発表がされました。また今年度から大学院生による学位研究の学内発表が義務づけられたことにより、17題のポスター演題が出され、討論時にはどの演題でも積極的な質疑応答がなされました。

昭和歯学会は雑誌名をこれまでの昭和歯学会雑誌から Dental Medicine Research に変更し、これまで以上に国内外の多くの研究者に本学での研究成果をアピールし、より質の高い昭和大学ならではの研究・臨床・教育を世界に発信して行きたいと考えています。



3年生学部横断 PBL が実施されました

歯科医学教育推進室 片岡竜太

医系総合大学の特色と全寮制という環境を活かして、本学では2007年から1年生を対象に医・歯・薬・保健医療学部横断のPBLチュートリアルを行っています。その経験を基に「チーム医療の有用性を実感すること」を主目的に、このたび3年生でも4学部横断のPBLを実施しました。

8~9名ごとの72グループに分けて、各グループに全学部・学科の学生が少なくとも1名以上入るようにしました。4学部の教員が協力して作成した「脳梗塞後寝たきりの高齢患者」と「転倒後外傷が見られる骨粗鬆症患者」を中心にする2つのシナリオのどちらかに各グループが取り組みました。12月12日(金)の午前中にシナリオが配布され、ファシリテータ同席のコアタイムで学習項目を抽出しました。午後は学生のみで、患者さんの追加資料を読み、学習項目を修正した上で分担を決めて、自己主導型学習を行いました。チーム医療を行う上で、すべての学部で知っておくべき項目と専門の学部にする項目は何かを考え、任せる項目は必ず専門と非専門のペアで調べて、討論が活発になるようにしました。19日(金)に各自が調べてきた内容を共有し、その後でチームとして患者さんに何ができるか考えてもらい22日(月)にグループごとに発表してもらいました。学生アンケートの結果では、学部により患者への視点や知識が異なり、学部を越えてディスカッションをする楽しさと有用性がわかったという回答が多く見られました。

歯科病院は他の附属病院と離れていますが、卒業生が昭和大学の理念であるチーム医療の担い手になれるように、さらに学部横断教育を充実させていきたいと考えています。



診療統計(平成20年12月分)

医事課長 久米徳明

	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	18,053	784.9	736.3	769.3
入院患者	451	14.5	10.0	13.1

Australasian Society for Human Biology 22nd Annual conference に参加して

口腔解剖学教室 中島 功

Australasian Society for Human Biologyの第22回例会が2008年12月10日から12日にアデレード大学内にあるSt. Marks Collegeにおいて行われました。この学会はその名の通り、ヒトについて分野を越えて広い範囲で考えようという集まりで、今回の発表内容もDNA、疫学、遺伝、形質人類学、古病理学、歯学、解剖学、生理学、心理学と非常に多彩でありました。この会は毎回参加者が約60名程度と少ないためか私の知る学会の中では最もアットホームです。今回の会場はカレッジのホールに大きな円卓を6つ配置しただけの簡単なもので、宿舎もカレッジの寮を使い、食事朝と昼はカレッジの食堂を使うという具合に3日間ほぼ一日中皆と顔を突き合わせている状態でした。今回の主幹はアデレード大学医学部のHenneberg先生で、初日の午後にはアデレード大学のRogers先生がAustralian Aborigineの初期の研究について講演されました。氏の共同研究者で私がアデレード大学留学中にお世話になったTasman Brown教授にも会場でお会いすることが出来ました。つづいて本学でも講演していただいているGrant Townsend教授がオーストラリアの双子の歯列について講演されました。私の発表は2日目の午前中でした。前回参加したときはアジア圏からも数名の参加がございましたが、今回は世界的な不況の影響か、アジアからの参加は私だけで、他はオーストラリアとニュージーランドのみでした。特に歯科という分野に固執せずに広く色々な人と交流をしたいという考えのある方はこの学会に参加してみたいかがでしょうか。



行事予定

広報委員長 井上富雄

2月4日(水): 歯学部4年生共用試験(CBT)
2月7日(土), 8日(日): 第102回歯科医師国家試験
2月21日(土): 大学院歯学研究科Ⅱ期入試
2月22日(日): 歯学部4年生共用試験(OSCE)
3月1日(日): 歯学部入学試験(選抜Ⅱ期)
3月19日(木): 卒業式
3月26日(木): 大学院歯学研究科修了式

昭和大学歯学部同窓会学術委員会 からのお知らせ

歯学部同窓会 野中直子

2008年度 第2回 昭和大学歯学部同窓会ポストグラデュエートセミナーを開催いたします。今回は「インプラント治療に関わる基礎と臨床の統合」というメインテーマで3名の先生方にご講演をしていただきます。同窓生以外の方の受講も可能ですので、是非皆様ご参加ください。

- ◆ 日程: 平成21年2月22日(日) 10:00~17:00
- ◆ メインテーマ: 「インプラント治療に関わる基礎と臨床の統合」
- ◆ 第一部: 歯牙喪失に伴う顎口腔構造の解剖学的変化
講師: 中村 雅典 先生(昭和大学歯学部口腔解剖学教室 主任教授)
- ◆ 第二部: インプラントの生体力学とメカノバイオロジー
講師: 佐々木 啓一 先生(東北大学大学院歯学研究科・口腔機能形態学講座・口腔システム補綴学分野 主任教授)
- ◆ 第三部: インプラント周囲辺縁骨の吸収にかかわる要因
講師: 西堀 雅一 先生(西堀歯科医院 院長)
- ◆ 会場: 昭和大学旗の台校舎 4号館 500号室
- ◆ 受講料: 歯科医師9,000円(当日10,000円)
歯科衛生士・技工士7,000円(当日8,000円)
- ◆ 申し込み方法・お問い合わせ:
2月16日(月)締め切り
昭和大学歯学部同窓会事務局までお願いいたします。

TEL: 03(3784)8077, FAX: 03(3784)4029

編集後記

口腔解剖学教室 野中直子

4学部合同のPBL教育が行われています。この試みは国際的にも類をみないそうで、昭和大学の特徴をいかした独自の教育になります。医・歯・薬・保健医療学部が一丸となって、これからの昭和大学を盛り上げて行きましょう。

年の初め、また入試シーズンのお忙しい時期にもかかわらず、執筆を快くお引き受けくださいました先生方に深く感謝いたします。

今年も皆様にとりまして、そして昭和大学にとりまして、良い年となりますように……

